

愛知淑徳大学 小林素文学長 インタビュー



愛知淑徳学園は1905年(明治38年)、愛知県初の私立高等女学校として創立されました。2004年(平成16年)には創立100周年、翌2005年(同17年)には創立100周年を迎えます。2005年はまた、大学設立30周年の節目にも当たります。愛知淑徳大学はこの記念すべき年を、さらさら125、150周年に向けた新たなスタートの年と位置づけ、さまざまな記念事業を予定しています。

医療福祉学部の新設計画

新学部設置の背景をお聞かせください。
「1つは、学園創立者が掲げた教育目標。10年先、20年先にも役立つ人材の育成」と、『陰徳』の伝統精神を現在に踏襲したものの、その流れを汲んだものに取り組みたいことです。陰徳というのは、陰日向なく徳を行う、現在で言えばボランティアの精神にも通じるものです。そしてもう一つ、大学が平成7年に男女共学となつたときの理念『違いを共に生きる』をさらに強調し、発展させようということです。これまでは主に国籍、性別、世代の違いを越えて共に学ぶという姿勢でした。しかし現在は、障害者と健常者との違いにも目を向けることが必要とされています。そのため、社会的弱者

と言われる高齢者、障害者などの問題に取り組みなければならぬと考えました。

この2つの方針をもとに、本学としては初めて医療貢献、福祉貢献の分野に参入することとし、『医療福祉学部』を新設します。ここでは社会福祉士や精神保健福祉士、言語聴覚士、視能訓練士などを養成します。本学には関連する分野として文化創造学部の環境文化専攻があり、これを医療福祉の方へ広げていくこととなりますので、環境文化専攻は発展的に解消することになります。

ビジネス学部の新設計画

2つ目の新学部、ビジネス学部についてはいかがでしょうか。
「本学では『不易流行』の考え

愛知淑徳学園創立100周年・愛知淑徳大学開学30周年記念事業

開学時から続く「不易」と「流行」を柱として現代に即した

方を大切にしています。『不易』といつのはいつの時代にも変わらないもの、たとえば少人数によるゼミナールなどでの学業により、いつの時代も変わらない時代を洞察する知性を身に付けることです。対して『流行』は、今の時代に即したものです。たとえば現代に必須とされる英語、コンピュータを実践的に身に付けることなどが挙げられるでしょう。

『ビジネス学部』は、そうした実践的なものによりウエイトを置き、現在の『ビジネス』で重要だとされる英語、コンピュータ、コミュニケーションの手段を磨くことは当然のことですが、さらに経営学部や商学部ではなく、ビジネス学部という名称を用いたのは、実践性を重視したためです。税理士や公認会計士、ファイナンシャルプランナー、証券アナリストなどの資格も狙つことのできるカリキュラム編成が特徴です。この学部も「コミュニケーション学部」で「ビジネス」を学べる学際的な新設です。

「ビジネス学部の新設は、現在、企業が即戦力を求めているという社会的ニーズも大きいのではないでしょうか。それは当然です。しかし『実践』の意味を単なる技術の習得だと理解していただけては困ります。どんなに英語が話せても、大切なは何を話すかということです。コミュニケーション

キャンパスの充実

現在、星が丘キャンパスでは新校舎を工事中ですが、完成後はどのような感じでしょうか。

「『違いを共に生きる』の理念を徹底するために、あらゆる面でのリアフリーを考えています。建物にエレベーターを設置したり、スロープを設けたり、歩車分離と分煙の徹底などです。

また、大学と中高のゾーンを明確に分けます。大学は夜まで開講しますし、エクスアンプションセンターには一般の方も訪れる開かれた場所です。しかし未成年である中高生が学ぶ場は、保護されていることが必要です。そのため両者をきちんと区別して、セキュリティにも力を入れます。ただ大学と中高と、全く交流がないわけではなく、中高生は大学の図書館などを使うことができます。大学の方から中高へは勝手に入ることはできないということです。

全体としてかなり大がかりな事業になりそうですか。

「そうですね、しかし学校といつものはがらりと変わるわけではありません。100年前から連続と続く、いつの時代も変わらないものをバックボーンとして、現代に即した実践的なものにも取り組んでいく。そういう事業だと思っています。」



々の操作に長けても、大切なのはコンピュータを使って何をするかということです。必要なのは、常に問題意識を持って、何か問題が起きたときその問題をどう捉えるか、どう処理していくかという手法なのです。ビジネス学部では、その手法を学ぶことが最も大切な実践と考えています。

大学院文化創造研究科の新設計画

2つの新学部に加えて、大学院の新研究科も新設されるそうですか。
「文化創造学部の表現文化と多元文化の2専攻を基礎として、それぞれ大学院文化創造研究科の『創造表現専攻』、『国際貢献専攻』として発展させます。

『創造表現専攻』では創作にポイントを絞り、さまざまなクリエーターを養成したいと考えています。講師には著名な作家や詩人、映画監督、漫画家なども予定しています。中

部圏には多くの作家が在住しているので、夏季にはその方々を招いてキャンパスのようなものを開くことができればと思っています。
『国際貢献専攻』は、学部の多元文化専攻で現在、日本人・外国人を問わず国際ボランティアで活躍して